

高粱川 志塾

第2・3期

目次

02 ご挨拶

02 - 「今、まさに戦争が起こっている時代にあって、高梁川志塾を考える」

高梁川流域学校 代表理事 坂ノ上 博史

03 - 「beyond・・・な一年」

高梁川流域学校 副代表理事 中村 泰典

03 - 「可能性の拡大に直結する流域での人づくり」

高梁川流域学校 副代表理事 石原 達也

04 これまでの講座一覧

06 第2期講座事例

07 - 「地域×大学による地域福祉の向上」

川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科講師 直島 克樹 氏

07 - 「高梁市フィールドワーク」

佐藤紅商店 店主 佐藤 拓也 氏ほか

08 - 「高梁川志塾開校式・修了式」

10 インタビュー(第2期)

10 - Joe Vanda Bima Cahya(ジョ ファンダ ビマ チャヒヤ) 氏 (高梁川志塾2期生)

12 - 佐々木 聡 氏 (高梁川志塾2期生)

14 - 山口 百香 氏 (高梁川志塾2期生)

06 第3期講座事例

07 - 「SDGsの説明とカードゲームXの体験」

柏原 拓史 氏

07 - 「井原市フィールドワーク」

美星天文台 次長 伊達 卓生 氏、フリーアナウンサー 松島 彩 氏

08 - 「高梁川志塾開校式・修了式」

10 インタビュー(第3期)

10 - 杉山 誠 氏 (高梁川志塾3期生)

12 - 大西 万理子 氏 (高梁川志塾3期生)

14 - 竹内 義哲 氏 (高梁川志塾3期生)

代表者総括

今、まさに 戦争が起こっている時代にあって、 高梁川志塾を考える

写真:高梁川水系 小田川

高梁川志塾第1期の総括において、「不確実性の高い未来」あるいは「大きな変化の渦にまきこまれる」と記したところであるが、まさか2022年になつて戦争が起きる、それも世界大戦につながるかもしれない、という想像はしなかった(平和ボケ)。

一方、この高梁川志塾は、多様で、混ざり合つて、学び、実践することを旨とする。性別年齢の多様性はもちろんのこと、今期は、外国人や高校生の参加も得た。しがらみを超えて、真摯に未来に向き合う姿勢と言葉に、気付かされるころは大きかったと思う。さらに言えば、戦争あるいはマスメディア、SNSなどの「顔が見えない繋がり」においては「フレイクニュース」なども盛んに取り上げられる中、この高梁川志塾、あるいはそれぞれの繋がりにおいては、心理的安全性を信用できる人間関係が築かれていると確信する。

志塾は2年を経て、受講生同士、あるいは受講生と講師とのコラボレーションも次々と生まれている。本事業の「持続可能な倉敷市・高梁川流域とするため、地域の課題解決を実践する人材を育成する」目的に即して、「世界の情勢に比較すると、なんと小さな取り組みかもしれないが」希望である。

この志塾は、倉敷市がSDGs未来都市に選定されたことを契機としており、次年度は3年目で当初掲げたビジョンに対する進捗度を図る節目ともなる。コラボレーションを含めて、受講生の個別・具体の課題解決に向けたアクションを、一つひとつ、丁寧に取り組みをすすめていくこと、流域学校でもそれらを支援することが、成果につながるだろう。

流域の連携の原点の一つでもある高梁川流域連盟は、まもなく設立70周年を迎える、とのことである。大原總一郎氏が昭和29年に執筆した、連盟趣意書の第1項は「世界の平和」で始まる。先の終戦(昭和20年)からわずかに、戦争が実体験として記憶される時期のことである。ここにその第1項を再掲し、国内の隣人同士、すなわち、ここ高梁川流域で、衣食住学遊をとにもする私たちを誰ひとり取り残すことなく、大きな世界の情勢の中にあつても、相互理解をさらに深めて、丁寧な生活と、持続可能な未来への取り組みを継続していくことを確認して、本年度の高梁川志塾の総括とする。

一、ユネスコ憲章前文に、世界の平和は心の平和にある。各国の習慣風俗を知ることが戦争の悲劇から遠ざけると記されている。ユネスコの活動には色々な国際協力の計画がある。しかし我々は国際的な立場に立つだけでなく、国内的にもなすべき多くのことをもっている。ユネスコが国際間において果たすべく期待している事柄は、同時に国内の隣人同志がなさなければならぬこともある。

(高梁川流域連盟趣意書より第1項を抜粋)

最後になりましたが、伊東香織倉敷市長をはじめとする倉敷市役所のみならず、講師をお引き受けいただきましたみなさま、事務局スタッフのみならず、改めて、篤く御礼を申し上げ、関係各位の今後の更なる連携とご協力をお願いいたします。そして、何より、受講生・聴講生のみならず、真摯で、チャレンジに溢れる参加と取り組みに、敬意を表する次第です。

令和4年3月

高梁川流域学校 代表理事 坂ノ上博史



副代表者総括

beyond・・・な一年

中村 泰典

「think globally, act locally！」

感染症や戦争で誰もが世界の出来事を身近な事として感じ、自分ごととして対応せざるを得なくなった。国内ではSDGsは瞬く間に世間に認知され、言葉を知らないものはいなくなつた。

一方、多くの人たちのの中では、地域活動は世間を騒がす大事件に比べると軽く霞んでいるのでは、と私の心の中では波が立っている。

歴史的町並み保存も、初めは文化財保存だったが、しだいに住民による文化を見直す活動、さらに地域の個性を特色づける活動として深化・拡大した。また環境運動の一つとして、多様に展開している。

町並み保存活動は世代交代期になり危機が訪れ、深刻な課題に直面している。コミュニティ、伝統的な暮らし、木造の空間は内部崩壊の危機にあり、災害対応、開発圧力は歴史的町家町並みの価値に変化をもたらしている。

そのような状況ではあるが、地域の都市環境に関心を抱く若い世代との連携の中で、都市環境のフィールドワークが始まった一年であつた。我々の悩みを聞いて若い世代は自らの課題としてプログラムを作り始めた。

人口減少の上、都市に人口が集中していく現在、急速で無秩序な都市化は社会的、空間的な断片化をもたらし、流域の中山間地の暮らし、自然環境に負荷をかけている。都市環境と自然環境が共に変化していくことを俯瞰しつつ流域学校は多くの人とエネルギー、知恵と志が今まで以上に求められる。

今後各セクター・世代間の協働の創造力が活動のエネルギーになりbeyond・・・につながることを期待する。

高梁川流域学校 副代表理事 中村 泰典



副代表者総括

可能性の拡大に直結する 流域での人づくり

石原 達也

地域づくりにおいて「若者、よそ者、バカ者」という言葉が使われますが、これは丁寧な言うところ「現状に囚われすぎない、時代を踏まえた目線」「関係性に囚われすぎない、他地域比較の目線」「常識に囚われすぎない、アイデア発想の目線」ということかと思えます。現実としては、年代的な若さよりも柔軟な発想や実際の機動力、歴史的な経緯やまちの文脈や関係性を理解した調整や交渉力、アイデアを実現する実行力がなければ、まちづくりや地域課題解決は進まないものであり、この現実を踏まえたレクチャーを高梁川志塾ではバラエティに富んだ講師陣の皆さんにより実現してこれたのではないかと思います。

また、2年間の取り組みで様々な世代、経歴をもつ方々にご参加をいただけたことはこの塾の財産であり、特長でもあるかと思えます。同じく多様な世代、経歴を持ち既にまちづくりの取り組みを重ねている「先輩」とも言える講師による生きた知見を得られる塾は本塾以外に県内には存在しないと思われ、その講師による刺激を受けた多様な塾生同士が話し合い、またお互いに刺激をしながら年代や過去の立場を越えて学びあつたことも、この参加者の多様性だからこそ持てた場であつたと思えます。

全国で先行して行われているこうした人材育成塾では塾生による課題解決と合わせて経済的な効果も表れており、「地域づくりは人づくり」の証明でもあるかと思えます。本塾でも継続することで、その効果を高めていきたいと思えます。

高梁川流域学校 副代表理事 石原 達也

これまでの講座一覧

第1期講座一覧

No.	講師	テーマ
1	神崎 宣武氏	【半農半X】 備中人の四季を通じた稼ぎと暮らし
2	神崎 宣武氏	【備中は一円】 高梁川流域の多様性とつながりやすさ
3	神崎 宣武氏	【吉備と大和】 中央と地方とのあり方を古代吉備に学ぶ
4	藤井裕也氏	高梁川流域の地域おこし協力隊のこれまでとこれから（実践と狙い）
5	長野紘貴氏	WHY から始まる、スモールアクションと仲間づくり（1）
6	井口陽平氏	WHY から始まる、スモールアクションと仲間づくり（2）
7	佐々木博氏	2030 年の地方での暮らしのイメージ（デジタル対応を含めて）
8	澁澤寿一氏	高梁川なりわい塾
9	矢吹博和氏	合意形成ファシリテーションとアイデア発想ワークショップ（1）～（3）
10	古川明氏	水島誕生の歴史と未来に向けたまちづくり
11	大原あかね氏	大原総一郎が夢見た、高梁川流域の未来
12	川崎好美氏	とことん RESAS ワークショップ
13	松田礼平氏	地域おこし協力隊 実践事例（1）岡山と新見との2拠点連携での取組みについて
14	坂ノ上博史氏	SDGs 探求プロジェクト①ステークホルダー
15	中村泰典氏	まちづくりと観光の beyondSDGs ～倉敷の歴史的都市景観が、目指す未来像～
16	村上智英氏	新規事業立案の基礎
17	山本亮氏	SDGs カードゲーム体験講座
18	秋田修一氏	非営利団体の会計基礎
19	大久保憲作氏	SDGs と企業の社会的責任～クラモクが参画するグローバル教育プログラム～
20	坂ノ上博史氏	SDGs 探求プロジェクト②ロジックモデル
21	柳沢秀行氏	レクチャー 『大原美術館の歴史と作品』
22	柳沢秀行氏	体験型講座 『対話型作品鑑賞（大原美術館本館を使って）』
23	戸井健吾氏	月間 100 万 PV のブロガーが取組む地域メディアのビジョン
24	佐藤拓也氏	地域おこし協力隊 実践事例（2）特産品開発、地域おこし
25	塩飽敏史氏	高梁川流域の開発と環境再生への取り組み
26	坂ノ上博史氏	SDGs 探求プロジェクト③プレゼンテーション
27	佐伯佳和氏	地域おこし協力隊 実践事例（3）テーマ『日本の木を使うべき理由』
28	岡崎遼太郎氏	見せる資料のつくりかた（1）
29	岡崎遼太郎氏	見せる資料のつくりかた（2）
30	沖村舞子氏	地域おこし協力隊 実践事例（4）テーマ「地域密着・巻き込み型の場づくり・拠点づくり」
31	松原龍之氏	未来のために朝だけ畑をはじめた
32	赤木美子氏	幸せなこども時代をすべてのこども達に ～北欧の2週間 現場の考え方を聴いた～
33	森光康恵氏	11 年目を迎えた高校生による『聞き書き』の魅力を語る
34	石原達也氏	SDGs 達成の具体策を考える

第2期講座一覧

No.	講師	テーマ
1	池上慶行 氏	児島フィールドワーク：児島の繊維産業
2	菊竹有希 氏	貧困と多様性～どうして私は『くらがく』をつくったのか～
3	森分志学 氏	NPO 法人だっぴが取り組む SDGs 事例
4	利根弥生 氏	NPO 法人タブラササが取り組む SDGs 事例～『エコスマ』から続くそのコミュニティについて～
5	佐藤拓也 氏	高梁フィールドワーク：特産品開発と古民家再生
6	成田賢一 氏	いつも心にわくわくを
7	坂ノ上博史 氏	SDGs 探求プロジェクト①ステークホルダー
8	坂ノ上博史 氏	SDGs 探求プロジェクト②ロジックモデル
9	流域学校	高梁川流域の SDGs を考える①
10	藤原聖仁 氏 / 佐々木博 氏	テクノロジーとクリエイティブによる新しいまちづくり
11	大原あかね 氏	高梁川流域と大原總一郎
12	岩崎真子 氏	倉敷フィールドワーク：倉敷薄荷ワークショップ
13	直島克樹 氏	地域×大学による地域福祉の向上
14	松田礼平 氏 / 野波晶也 氏	新見フィールドワーク：地域資源活用、岡山ワインバレー
15	坂ノ上博史 氏	SDGs 探求プロジェクト③プレゼンテーション (1)
16	流域学校	高梁川流域の SDGs を考える①
17	赤木美子 氏	高梁川流域の未来をつくる子育て支援～人材育成の視点から～
18	坂ノ上博史 氏	SDGs 探求プロジェクト③プレゼンテーション (2)
19	神崎宣武 氏	高梁川流域の特長と持続可能性
20	石原達也 氏	SDGs 達成の具体策を考える

第3期講座一覧

No.	講師	テーマ
1	坂ノ上博史 氏	高梁川流域原論①ミッション編
2	森光康恵 氏	『聞く』から始まる物語
3	柏原拓史 氏	SDGs の説明およびカードゲーム X の体験
4	森分志学 氏	SDGs 探求プロジェクト①ステークホルダー
5	森分志学 氏	SDGs 探求プロジェクト②ロジックモデル
6	伊達卓生 氏 / 松島彩 氏	フィールドワーク：井原
7	坂ノ上博史 氏	高梁川流域原論②データ編
8	流域学校	高梁川流域の SDGs を考える①～③
9	梶谷俊介 氏	岡山トヨタ自動車の取り組む SDGs
10	中村泰典 氏	フィールドワーク：倉敷
11	大原あかね 氏	大原總一郎と倉敷考古館～旧暦で語るべし～
12	神崎宣武 氏	高梁川流域の四季五節の循環
13	赤澤靖弘 氏	SDGs の活用メソッドと役割
14	井関竜平 氏	六島浜醸造所の取り組みについて
15	森分志学 氏	SDGs 探求プロジェクト③プレゼンテーション (1) ～ (2)
16	大久保憲作 氏	"倉敷木材株式会社・株式会社エフエムくらしきの取り組む SDGs"
17	浅野直 氏 / 高山和成 氏	総社市フィールドワーク (1) ～ (2)
18	坂ノ上博史 氏	高梁川流域原論③対話篇
19	戸井健吾 氏	SDGs を見据えたメディアを通じての地域連携
20	岡崎遼太郎 氏	デザイン× SDGs / フリーペーパー STAR* の取り組み



高梁川志塾とは？

高梁川の自然や歴史、文化、および産業を「フィールドワーク」の教材に、多様な世代が所属や立場を超えて互いに学び、研鑽しあい、高梁川流域での地域づくりや、「持続可能」な地域を担う次世代の人材として成長し、行動につなげることを目指す塾です。

SDGs探求コースについて

探究学習とは、受講生自らが課題・テーマを設定し、解決のために情報を収集・整理・分析したり、周囲の人と意見交換・協働したりしながら進めていく学習活動のことです。このコースでは、座学に加えて、実習やプレゼンテーション作成などのアウトプットを前提として、プログラムに参加します。
(探求コース以外に、座学だけに参加する「聴講生コース」もあります。)

講師(例)

神崎 宣武 氏
(民俗学者・高梁川流域学校 校長)



大原 あかね 氏 (公益財団法人有隣会 理事長(大原美術館 理事長))
藤原 聖仁 氏 (株式会社KASIKI 代表取締役CEO)

その他、地域おこし協力隊OBで起業して活躍中の皆さんや、高梁川流域学校の役員メンバーなど事業の実践者、あるいはスキル・ノウハウの専門家、高梁川志塾OB/OGなど、多数の講師を予定しています。

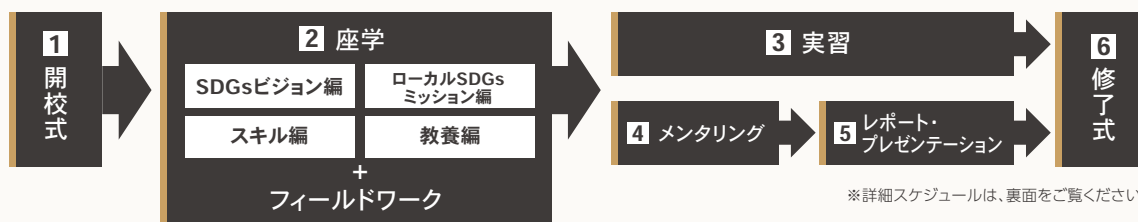
参加者の声



岩崎 真子 さん

倉敷市地域おこし協力隊員
倉敷薄荷陳列所所長

高梁川志塾では様々な分野の話聞くことが出来たので、自分の視野を広げる機会となりました。プログラム終了後も受講生の方と繋がりが良い刺激を受けています。二期生の皆さまとも今後関わっていただけたらと思います！



※詳細スケジュールは、裏面をご覧ください。

会場 倉敷市内ほか、高梁川流域全域 (講座ごとに異なる場合があります。)
会場とオンライン受講を並用して実施

定員 25名 (SDGs探求コース)
※聴講生は、別途、ウェブサイトからお申し込みいただけます。

運営 一般社団法人高梁川流域学校 **主催** 倉敷市



事業については
右記QRコードにて



こんな人にオススメ

- ✓ 地域の課題解決に取り組んでみたい人。
- ✓ プロジェクトやイベントの企画・運営のノウハウを学びたい人。
- ✓ SDGsを経営に取り入れたい企業の経営者、担当者。
- ✓ NPOや地域活動に参加している次世代人材。
- ✓ SDGsをより深く知りたい、行政関係者・教育関係者など。

座学（講座）の種類

<SDGsビジョン編>

高梁川流域の2030年のビジョンと、そこに向けた課題解決のための現状の取り組みを、実践者や専門家のレクチャーで深く理解し、アクションへの気づきを得ることができる講座。

【例】SDGsに取り組む団体による事例紹介：NPO法人だっぴ（森分志学 氏）・NPO法人タブララサ（利根弥生 氏）

<ローカルSDGsミッション編>

SDGsの17のゴールを高梁川流域版にローカライズして目標設定するワークショップ。

<教養編>

高梁川流域における、歴史・文化・産業などに関する教養や、活動の前提となる知識を得るための講座。

<スキル編>

プレゼンテーション、ロジックモデル・ビジネスモデル、探求学習のためのスキル・ノウハウを習得する講座。

<フィールドワーク>

流域流域における持続可能な取り組みの体験プログラム

【例】高梁市吹屋でのとうがらし収穫ワークショップ（佐藤紅商店 佐藤拓也氏）ほか。

受講形態

各講座の開催会場で直接受講、もしくはオンライン（Zoom等）での受講を選択。

※SDGs探求コース受講生は、専用の「Googleクラスルーム」へご招待となる予定ですが、事前にGoogleアカウントの作成をお願い致します。
※新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、オンラインのみ開催となる場合もございます。

プログラム

①開校式（必修） 2021年6月27日（日）午前

②座学・フィールドワーク 2021年6月27日（日）～ 2021年9月12日（日）
高梁川流域の第一線で活躍する豪華講師陣による講座をご用意しております。
※期間中、2時間（前半講義・後半ワーク）×最大30コマ程度（平日夜もしくは土日での開催）
※1コマは、2時間10分を基本的な組み立てとしています。内訳は、1時間のレクチャー、10分の休憩、1時間の質疑応答（もしくはワークショップ）の予定です。

③実習 2021年8月2日（月）～ 9月5日（日）

運営側で指定する団体の活動に参加する、又は自身のプランに即した実習／実践を行い、期間中20時間程度の現地実習を行います。

④メンタリング 2021年8月2日（月）～ 9月5日（日）

実習の前、中、後で、メンターとの面談を行い、ご自身のプランのブラッシュアップや、最終発表に向けた相談などを行います。

⑤レポート・プレゼンテーション（必修）

2021年8月16日（月）～ 2021年9月12日（日）

自らのテーマ・関心に合わせて、レポートもしくはプレゼンテーション資料の作成を行います。

⑥修了式（必修） 2021年9月26日（日）終日

それぞれの活動及びレポートもしくはプランについての発表を行います。

土日		平日	
1限	10:00 ～ 12:10		
2限	13:00 ～ 15:10		
3限	15:30 ～ 17:40		
4限	18:00 ～ 20:10	4限	18:00 ～ 20:10

参加費

①SDGs探求コース受講生

一般12,000円（税込） 学生 8,000円（税込）
（全プログラムへの当日参加、アーカイブ視聴が可能）
※会場受講・オンライン受講に関わらず一律料金
※フィールドワークは、内容により別途実費での参加費がかかる場合がございます。

②聴講生（座学のみ参加）

会場受講：1,500円／回 オンライン・アーカイブ受講：500円／回
※後日参加者のみ閲覧できるページをご案内予定です。
※講座によっては、別途、実費を徴収する場合があります。
※講座によっては、無料公開の場合があります。

決済方法（事前）

①クレジットカード（SDGs探求コース受講生・聴講生共通）

※お申込みをいただいた方に決済用のページをご案内

②銀行振込（SDGs探求コース受講生のみ）

※お申込みをいただいた方に口座情報をご案内

お申し込み方法 ※6月20日（日）締切

SDGs探求コースへの参加をご希望の方は、下記よりお申し込みください。

1 メール：seminar@takahashigawa.or.jp

- ご所属 ●ご氏名（ふりがな）※複数の場合は全員分
 - 電話番号 ●ご住所 ●決済方法（クレジットカード／銀行振込）
 - 受講方法（会場／オンライン） ●ご参加への思い
- をご記載の上、当運営へメールをご送信ください。

2 Googleフォーム

<https://forms.gle/cazAqsQAwNph6JkL9>

聴講生として受講をご希望の方は、事業HP等にて各講座のお知らせをいたしますので、そちらからお申込みください。



本件に関するお問い合わせ先 一般社団法人高梁川流域学校 事務局（担当：山本）

【電話】086-527-6248（分福代表） 【FAX】086-691-2289 【メール】seminar@takahashigawa.or.jp

【住所】岡山県倉敷市中央2丁目13-3 住吉町の家 分福



地域×大学による 地域福祉の向上

直島 克樹 氏

川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科講師

講師の直島克樹さんは「子どもを主体とした岡山地域づくりネットワーク・子どもの貧困対策ネットワーク会議」の代表を務められているほか、倉敷地域の福祉的課題について、学生と地域の方々の協働による解決を目指すプロジェクトを行っています。

講座では、川崎医療福祉大学医療福祉学部と倉敷東小学区の社会福祉協議会・町内会で行う「まちづくり団体「e-kommunity」研究所」や、同大学の学生が在学中に設立した「一般社団法人子どもソーシャルワークセンターつばさ」の取り組みや今後の課題等についてお聞きしました。

受講生からは次のような感想をいただいています。

「共同売店のお話は、初めて聞いた取り組みで面白いなと思いました。まちの住民が事業として行うこともそうですが、何かあればここに来るといふ場所になつていくというのが興味深かったです。福祉系の学生さんの取組は、問題意識をもつて取り組んでいるのに感じしました。また学生が来てくれれば解決すると考えられている地域住民の方がいらつしやること、学生の代が変わる時の引継ぎが課題になつていくことなどが知れました。」(服部さん)

持続可能な地域を目指すうえで、地域の福祉という視点は欠いてはならないものです。その福祉について、未来ある学生たちが積極的に動いているというのは、明るい話題ではあります。直島先生が話していたように、学生の主体性を活かすことも、あくまで地域全体が主体となつて取り組まなければならないと感じました。

(高梁川流域学校事務局 梶谷／facebookより抜粋)



高梁市フィールドワーク

佐藤 拓也 氏

佐藤紅商店 店主
ほか

高梁市フィールドワークは吹屋の町歩きと古民家改修体験、更に吹屋の現在とこれからを知る特別講座の豪華3本立て。暑いからいのか晴で、大変充実した活動となりました。

特別講座について講師を務められた佐藤拓也さんは元「高梁市地域おこし協力隊員」で、任期中に吹屋の新たな特産品、赤い柚子胡椒「紅だるま」の開発に取り組み、任期後は「佐藤紅商店」店主として「紅だるま」の製造・販売を行いながら、吹屋の魅力を様々な形で発信されています。このほか吹屋の町歩きでは戸田誠さん、古民家改修体験では横山弘毅さんと矢動丸裕子さんに講師をご担当いただきました。また講座全体のコーディネートについては佐藤さんと川上雅美さんにご協力いただきました。

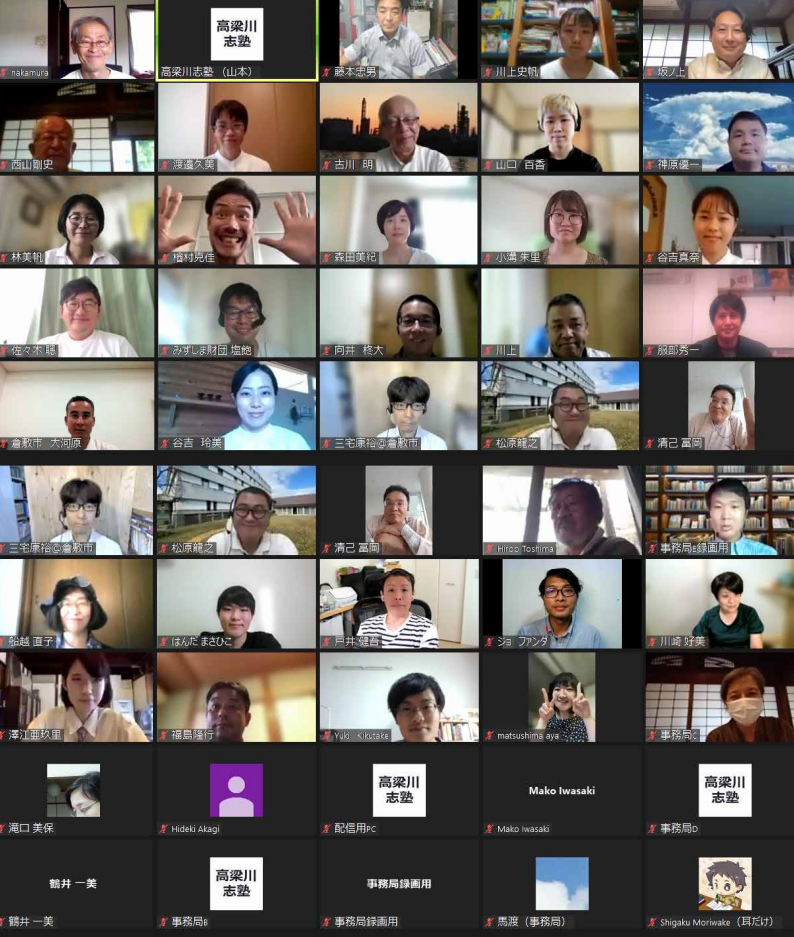
受講生からは次のような感想をいただいています。「吹屋の歴史をたくさん教えていただきました。石見の文化が伝わっていること、馬で中国山地から米・鉄・薪が運ばれ、銅やベンガラが運び出されたことなどに興味がわきました。

古民家の修理作業はベンガラを塗りました。防虫効果があると伺ったので、家の床下にも塗ってみたと思います。」(滝口さん)

「吹屋は、地元の人たちで盛り上げようとしているのかと思つていただけ、移住者などの外部の人たちが中心となつて盛り上げていることが一番の驚きでした。また、古民家の再生作業も想像以上の肉休労働だったが、いい経験になりました。」(匿名希望)

過去鉦山やベンガラで栄え、多くの人々が交易に訪れた吹屋は今、外部から移住してきた人を温かく迎え入れ、町おこしを一緒になって進めています。高梁川志塾としても今後も何かしらの形で吹屋に関われたらと、改めて思っています。

(高梁川流域学校事務局 梶谷／facebookより抜粋)



高梁川志塾開校式・修了式

高梁川志塾2期目 ～現地で学び、地域課題を共有する～

第2期は、2021年6月～9月の期間で開校し、受講生は27名、うちSDGs探究コースが23名、単位取得コースが4名でした。

第1期に引き続き「地域（歴史・文化・産業などの）理解促進」「SDGsの理解促進」「実践に向けたスキル・ノウハウの習得」で構成しました。新たにフィールドワークを追加し、各地域（児島、新見、高梁）での実践者が講師となつて、町歩きや、体験型のプログラムを実施していただきました。加えて、高梁川流域での地域指標（ローカルSDG）を考える講座も実施し、より地域理解が深まるカリキュラムに改めました。

また、「倉敷市・高梁川流域のSDGs×クラウドファンディングセミナー（主催：倉敷市）」「RESAS教育活用ワークショップ探（RESAS オンラインセミナー）（主催：RESAS活用教育推進委員会岡山部会）」を連携講座として位置づけ、相互に参加ができる仕組みとしました。

開校式は、住吉町の家分福で開催し、神崎宣武高梁川流域学校校長も会場にお越しくださいました。

高梁川流域学校役員からも挨拶を行い、その中でも、大久保相談役からのメッセージは「志を持つこと」。

高校生から留学生、リタイア後の新たなチャレンジを目指す方まで多種多様な方々にご参加いただき、それぞれの志を立て地域課題解決のためのスタートを切りました。

成果発表会・修了式は、当初は公共施設で実施する予定でしたが、岡山県でもまん延防止等重点措置の適用を受けたことにより、感染防止の観点から、原則としてオンラインでの実施となりました。

成果発表はグループに分かれて行い、1グループ3～4人が発表しグループ内で感想や質問を共有する形をとりました。1人の発表の持ち時間が約5分と大変短いながら、3か月間の志塾で学んだことを活かし、これまでの自分の取り組みや、これからの自身の活動について発表されていました。

高梁川流域学校の役員だけでなく、主催の倉敷市やお世話になった講師の皆様、1期生等多くの関係者の皆様にご参加いただき、発表内容に対するフィードバックを受けながら、ご自身がまだ気づいていなかった良い点や、次のアクションにつながるヒントをたくさん得たものと思います。



高梁川流域に住む 外国人の想い

Joe Vanda Bima Cahya (ジョ ファンダ ビマ チャヒヤ) (高梁川志塾2期生)

インタビュー 梶谷 友香

インドネシア出身で、岡山県高梁市にある吉備国際大学に通う留学生の Joe Vanda Bima Cahya (ジョ ファンダ ビマ チャヒヤ) さんが、2期生として高梁川志塾に参加された時のお話をお聞きました。

高梁市は留学生など外国籍の方が多い街です。高梁市の人口のうち外国人は約900人で、岡山県内で最も高い割合となっています。しかし日本人と外国人が触れあえるような交流の機会や場がありません。お互いのことをよく分かり合えずにいます。

そのため、日本人と会話をしながら日本語を勉強し理解する機会がなく、防災面でもどこに頼れば良いかわからず、不安に思っている外国人の方が多いそうです。

地域の人たちとの触れあいを求め、大学入学以来、ボランティアやスポーツなどで市民コミュニティの活動に積極的に参加してきたジョさん。たかはし国際交流ゴミ拾いでは、議員さんも参加され楽しい交流となりました。また、大学で学んでいるファシリテーターの能力を活かし「NPO法人だつぴ」にて中高生のキャストとして会話のサポートをしています。

大学のゼミの先生からのお知らせで高梁川志塾の存在を知ったジョさんは、高梁川志塾1期生募集のパンフレットで、目標に向かって実践している人が大勢いるのを見て興味を惹かれました。もともと日本の歴史や日本人の考え方・志といったものを学びたいと思っていたのです。

ジョさんは、以前からSDGsにも興味があり、2021年3月に環境省が開催した「ローカルSDGユース・ダイアログ@岡山・滋賀」に参加しています。日本人と外国人の交流の場が増えることを望みつつも、今の自分では力不足だと痛感

していたところでした。

「高梁川志塾で学び、母国から遠く離れ高梁市に住む外国人が、第2のホームタウンとして安心して住めるように市民と外国人をつなげる存在になりたい。外国人が懐かしく思えるような、心のよりどころになるような、そんなまちづくりをしたい」とジョさんは心を奮い立たせて参加を決意しました。

塾生や講師などいろいろな人からたくさんのおアドバイスももらえて感激したジョさん。多くの人の協力があつて無事に高梁川志塾を修了でき、本当にありがたく思っているそうです。今後の活動への刺激になり、修了後も何かあれば協力すると言ってくれる方たちに出会えたことが、大きな財産となりました。高梁川志塾で学んだことを人生にも活かしたいそうです。

自分が参加しても大丈夫なのだろうかという戸惑いがあったジョさんは、唯一の外国人ということでも不安に思う気持ちが強かったそうです。実際に参加してみると、学校のような雰囲気になんか心しましたが、真剣に学ぶ方たちを見て、「まだ若造だけどもっとがんばろう、負けられない」という気持ちになったジョさん。特に勉強になったのは、SDGsの座学だそうです。

「自分は実践型ですぐ行動するタイプだけど、じっくり考えることで新しい気づきを得られるように成長ができ、感謝しています」と語ります。

ジョさんの考えるキーワードは多様性です。人間は一人ひとり様々な個性を持っています。お互いを知り認め合うことで、個性や価値観の違いが理解できます。「社会における自分の役割が何かを理解し、自分の能力を活かして、誰もがお互いの個性や価値観を尊重し生きていける世の中を目指したい。また周囲の評価に振り回されず

自分の想いを貫く強さも同時に持ち合わせたい」とジョさんは考えます。

大学卒業後は海外とのつながりを持ち、持続可能な社会に向けて多様性を尊重する方針の会社に就職し、地域へさらなる社会貢献をしたいそうです。

今まで背中を押していただいた人々への感謝の気持ちを忘れずに、学んだことや活動してきたことを活かして、流域学校に協力して恩返しをしたいというジョさん。ファシリテーターの能力を磨きながら、高梁川流域だけでなく岡山県内のいろいろな場所でボランティアやイベントを開催し積極的に活動したいと目を輝かせていました。

ジョさんが、今後取り組みたい活動は以下のこと。

「自分ならではの強みを活かし、チャレンジ精神を大事にして多文化共生への取り組み」「自分が目標としているSDGsの達成に向けてチャレンジすること」「国や人種などのそれぞれの違いを認めて理解し交流すること」などです。

避難情報や避難所などの防災面も含め、日本人も外国人も暮らしやすいまちづくりのために様々な活動をしていきたいそうです。

高梁川志塾での学びを活かし、2021年10月には高梁図書館にて大学のゼミの仲間たちと「多文化共生ワークショップ」を企画し開催。2022年3月には、備中高梁会議2022に登壇し「多文化共生プロジェクト」の発表をしました。高梁川志塾での学びと挑戦は、ジョさんの中でのかけがえのない財産となっています。ゆくゆくはインドネシアと日本の架け橋になりたいと語ります。母国を愛し日本を愛するジョさんの今後のグローバルな活躍が、とても楽しみです。

Joe Vanda Bima Cahya
(ジョ ファンダ ビマ チャヒヤ)

吉備国際大学社会科学部経営社会学科3年生。インドネシアジャワ島出身。大学に入学以来、ボランティア活動や地域貢献活動に参加しています。高梁川志塾に参加したことにより自分の価値観が大きく変わりました。チャレンジ精神を大事にしながら、留学生として多文化共生への取組にもっと力を入れたいと思います。

高梁市の市民と外国人をつながたい
話し合う場と交流の場を作りたい
しかし自分が留学生の一人として力不足

やりたいことと私ならではのできること：

- 学んできたファシリテーターの能力を磨きながらイベントをつくりたい
- 留学生の私ならではのことにしたい
- 大学のゼミの多文化共生に興味を持つゼミ生と「多文化共生プロジェクト」を形成する
- 既に高梁市で市役所と連携してる日本語教室をやっておられる方に協力していただく
- 高梁市の市民と外国人の交流の場をつくる

COMMENT

考える前に行動しているので失敗も多いのですが、チャレンジ精神旺盛でどんなことにも前向きに取り組んでいます。多文化共生プロジェクトやSDGs活動などに、留学生としての立場を存分に活かして取り組んでおり、今後の活躍が楽しみです。

吉備国際大学副学長 井勝久喜

多文化共生プロジェクト以外の
今後の自分がやりたいこと

- ・高梁川流域志塾に学んできたことを人生に活かしたい
- ・日本の歴史や日本ならではのことを学びたい
- ・留学生でありながらも、自分の住んでる地域や岡山県内のボランティア活動等に積極的に参加したい
- ・大学から卒業して日本とインドネシアの間の架け橋になり日本に就職したい



水島のまちづくりを 流域全体へ波及していく

佐々木 聡(高梁川志塾2期生)

インタビュー 中島 理沙

高梁川志塾に第2期生として参加した佐々木聡さん。2015年神奈川県湘南から倉敷市に帰郷してきました。現在は水島臨海鉄道会社で企画室の主幹を務めつつ、水島まちづくり協議会での活動にも奮闘されています。すでにさまざまな行動を起こされている佐々木さんの地域への想いや、高梁川志塾での体験について聞きました。

佐々木さんが水島のまちづくりに興味を持ったきっかけは、「りんてつ沿線手帖」との出会いでした。「りんてつ沿線手帖」とは、水島臨海鉄道の魅力を発掘しようと、地元の大学生、高校生たちが協力しあつてできたガイドブックです。

佐々木さんは前職である鎌倉のケーブルテレビ会社に勤めていた頃から、地元密着の概念を叩き込まれてきました。しかし実際は企業が一方的に地元の情報を発信しているだけ。水島臨海鉄道会社に入社した時、「りんてつ沿線手帖」を見た佐々木さんは、地元の人発信で地域を盛り上げようと動く様子にかなり驚いたと話します。そんな地域の人に愛される水島を、もっとよく知りたいと思ったことが、現在の取り組みに繋がっています。

佐々木さんは地域のために率先して行動される水島の人たちに影響を受けたと語ります。その中でも特にふたりの人との出会いが、佐々木さんを動かしました。民間主導のマルシェ「臨鉄ガーデン」の運営を行い、地域活性に貢献している土屋遼介さん。ミズシマ・パークマネジメントLabと呼ばれるまちづくりグループの代表である古川明さん。ふたりの行動に刺激を受け、肩を並べたいと思うようになったそうです。

水島臨海鉄道会社が創立50周年の時、佐々木さんは「りんとつ沿線手帖」を考案した張本人の秋田さんにお会いする機会がありました。水島と倉敷を繋ぎたいという熱い想いを聞く中で、地域についてもっと勉強したい気持ちが大きくなった佐々木さん。気づけば高梁川志塾の申込ボタンを押していたそうです。

高梁川志塾での学びは、すごく刺激的だったと話す佐々木さん。佐々木さんと同じように、地域をよくしたいと熱い想いを持っている人たちの交流は、とても充実した時間のようでした。なかでも、高梁川流域学校の代表理事を務める坂ノ上さんは、佐々木さんにとって憧れの人だと話します。坂ノ上さんの仕事に対する推進力や影の努力などに尊敬を抱いていた佐々木さんは、貴重な経験ができたと言います。

高梁川志塾に入る前は全く土地勘がなく、高梁川もよく知らなかった佐々木さん。高梁川志塾で学ぶうちにたくさん出会いがあり、地域の名前と人の顔が結びつくようになったと語ります。ただの風景だった高梁川が、その場所には色々な想いを持っている人が住んでいるのだと感じるようになったそうです。

佐々木さんは人生において、人と関わりあうことをとても大切にしています。過去に佐々木さんが悩んでいる時、人との出会いによって良い影響を受けた経験があるそうです。人と関わりあい、影響を受けながら前に進んでいくことに幸せを感じているのだと思いますと語る佐々木さん。高梁川志塾での素敵な出会いが、佐々木さんの地域愛をより一層深いものにしたように感じました。

主体性の欠如は高梁川流域だけの話ではなく、社会全体の課題であり、水島にも当てはまると語る佐々木さん。頭では行動したほうが良いとわかっている、実際に行動を起こすかというところ起さない。そんな風潮をここ1年すごく感じているそうです。高梁川流域にもいろいろな課題やSDGsの目標がありますが、知るだけではなく行動することが一番大切だと語ります。

行動するといっても、その大きさはさまざま。佐々木さんは、みんながびつくりするようなことやつて見せた方が景色が変わるんじゃないかと語ります。その第一歩が水島のまちづくり協議会の取り組み。

佐々木さんは、地域に再生可能エネルギーの普及機能を作ろうと行動を起こしている真つ真中です。いずれは水島での取り組みを高梁川流域など地域全体に波及していきたいという大きな夢も語ってくれました。一筋縄ではない取り組みに苦戦しつつも、地域のために行動を起こしている佐々木さんは、とてもまぶしく見えます。

「私変態なんです」と笑って冗談を話す佐々木さん。その突き抜けた行動力は、なかなか真似できるものではなく、水島の未来を明るく照らす光のように感じます。人との繋がりから学びを深め、実現可能性に止まらず広い視野で地域を見つめる佐々木さん。今後の水島のまちづくりからも目が離せません。

佐々木 聡

1970年、倉敷駅にほど近い千秋座の向かいで生まれ、岡山市は百間川の原っぱを駆けながら育つ。幼少期からのコンプレックスと向き合う研究に没頭しすぎて、人より10年遅れて社会へ。鎌倉の小さなテレビ局の総務人事、社員13,000名の大企業における企業理念策定ファシリテーター・エバンジェリスト等を経て、2015年暮れに妻、息子、猫2匹と帰郷。2018年より水島臨海鉄道に在職、2020年より企画室主幹。

COMMENT

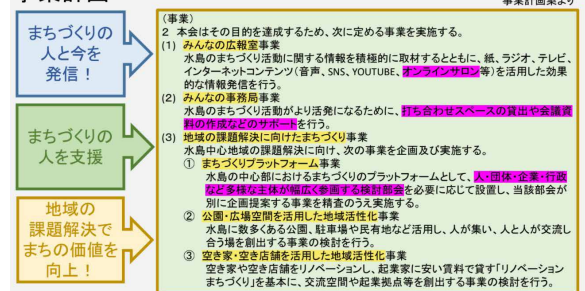
あらゆることに関心を示す好奇心と、目の前にあるもの全てを受け入れようとする度量を兼ね備えた水島の逸材。持ち前の論理的思考回路と全体を俯瞰する能力をフルに発揮して持続可能な水島の未来図を描くと共に、実行段階において、如何なくリーダーシップを発揮されんことを大いに期待しています！

ミズシマ・パークマネジメントLab.
代表理事 古川明

水島まちづくり協議会の構想



事業計画





流域の楽しさを 発見する場所

山口 百香(高梁川志塾2期生)

インタビュー 菊竹 有希

高梁川志塾の第2期生として参加した山口百香さん。普段はデザイナーとして倉敷市を中心にロゴの制作やチラシをデザインしています。また、大学生の頃から所属していた「フリーペーパーSTAR」というコミュニケーションマガジンの編集者として活動しています。今回、2022年6月下旬から9月末の約3ヶ月間の高梁川志塾を通して、山口さんがどのように変化したのかをインタビューしました。

山口さんが高梁川志塾の第2期生として参加するきっかけとなったのが、高梁川志塾第1期生のインタビューです。インタビュー対象者である1期生のメンバー同士が楽しそうに会話している様子を見て、山口さんも興味を湧いたそうです。また、取材対象者の志塾に対する想いや様子を聞いて、一層興味や関心が高まったとのこと。元々、デザイナーという職業では、関係人口も少ないことから、自らが行動しなければ新たな出会いや、様々な人の考えを知る機会がなかったそうです。

山口さんは、自らを「停滞が好きではない性格」と表現していました。高梁川志塾では、講師はもちろん、塾生も年齢・職業・性別・生き方などが異なる人が集まっています。新しい発想に出会うためには山口さんの活動範囲を広げていく必要があったと伝えてくれました。

高梁川志塾最初の授業は4人1グループで、それぞれがどのような活動しており、なぜ高梁川志塾で学ぶのかなどを伝える講義だったとのこと。一緒になったメンバーのうち、山口さんは最年少。山口さん以外の3人は哲学好きで、熱意のあるメンバーです。一方、熱意ではなく興味や関心から参加した山口さんは3人と自分を

比較し、不安を感じていたそうです。

不安を持ち続けていた山口さんは、高梁川志塾の講義で、一つの答えが見つかりました。ある日の講義で講師に対し、「新しい取組みに対して、不安ありますか。」と尋ねたそうです。その答えは、「不安はあるが、落ちこむとは違う。落ち込むことは、自分の能力ならもつとできるという考えが前提にある。不安とは初心に返っていることであり、不安を感じることがこれからの成長に繋がる。」というものでした。この言葉が励みとなり、不安が成長の兆しであることを認識したと山口さんは振り返ります。

高梁川志塾には、社会を変えたいなどの熱意を持った人たちが参加しています。高梁川志塾を通して、新しい取組みにチャレンジする人たちも少なくはありません。このような中、何か新しい取組みをしなければならぬと感じていた山口さん。講義や共に学ぶ仲間と過ごす時間から、楽しむことの延長線上に新しい活動などがあることを知ったと振り返ります。

山口さんが楽しいと感じることは、誰かと一緒に楽しむ状態のこと。そこで山口さんが出来ることは、「自分が楽しみながら、楽しい様子を伝えていく」ことであるそうです。実際に、志塾生の仲間が開催したイベントにも定期的に参加しているとのこと。足を運び一歩踏み入れることで、今まで知らなかった楽しさに触れたと実感しているそうです。

これから高梁川流域の未来に向けたキーワードは、「持続可能な未来を作るために、自分が持続可能であること」と話す山口さん。その背景には、これまでの活動や高梁川志塾を通じた答えがあります。高梁川志塾に参加することで「活動の原点が普段の自分である。自分の興味ある

分野から延長した先に新たな興味や関心が生まれる。それを追う中で課題を見つけ、課題解決に取組む流れが出来る」との答えを導きだしたそうです。

山口さん自身の活動を通して、「足を踏み入れた先にいる人たちが感じていることを取材し、その地域に暮らしている人たちの様子を伝えることが自分の役割である。」と話していました。

小さな持続可能が増えていくこと、それを伝える山口さんのような存在がいること。持続可能な流域という社会を形成する中で、自分ができることを自分のペースで行動する大切さを山口さんとの対談で感じました。

山口さんは、高梁川志塾を通して友人ができた活動の幅が広がったそうです。その一つが、倉敷市水島の歴史や現状の調査。高梁川志塾の2期生として出会った仲間と、「水島の公害や歴史をまとめようと意気投合したことから、一緒に冊子を作成することになりました。水島とはこれまで関わりがなかったもので、初めて発見するものばかりだったと振り返ります。

高梁川志塾をきっかけに、山口さんの興味や関心の幅が広がり、地域に足を運ぶこととなりました。足を運んだ先で出会った人やモノを通して、さらに興味が高まっていきました。関心が高まることで、見えてくる世界が違ってくるのかもしれない。

「足を運ぶこと」この言葉が印象的です。高梁川志塾もそうですが、自らが足を運ぶことで見えてくるものがあります。突き進むことで、時には不安を感じることもあるでしょう。しかし、一歩踏み出さなければ、いつまでも不安に悩まされま。一歩進んだ先に、次に繋がるものがある」と対談のなかで感じました。

山口 百香

1995年、愛媛県出身。3歳から岡山県岡山市にいる。倉敷でロゴやチラシなどのデザインをしながら、県内の学生やクリエイターと一緒にフリーペーパーSTAR*を作っている。これまでの自分の活動と地域との関わりを広げるため高梁川志塾へ参加する。卒業後は、同期の塾生たちと協力しながら、まちの記憶を集めるメディアを制作中。

未来の人のために

高梁川流域をはじめとした

「失われていくものを記憶するメディア」をつくる

COMMENT

初めて会った時から山口さんは、常に物事へ疑問を持ち、問い続けている印象がありました。それが新たな地域社会を構築する上では大切な要素となるはずです。言われたことを鵜呑みにするのではなく、相手の考えを知り、その背景を理解しようとする姿は私も見習いたいと思います。

LAID-BACK DESIGN 岡崎遼太郎

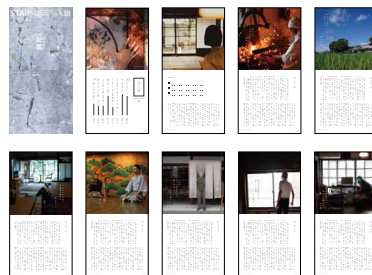
13 構成イメージ

大きさは148mm×148mm
全体で36ページの冊子
上下に開く形
(カレンダーの作りをイメージ)



右の画像はレイアウト案の一部を抜粋

原稿は制作中





高梁川志塾とは？

高梁川の自然や歴史、文化、および産業を「フィールドワーク」の教材に、多様な世代が所属や立場を超えて互いに学び、研鑽しあい、高梁川流域での地域づくりや、「持続可能」な地域を担う次世代の人材として成長し、行動につなげることを目指す塾です。

SDGs探求コースについて

探究学習とは、受講生自らが課題・テーマを設定し、解決のために情報を収集・整理・分析したり、周囲の人と意見交換・協働したりしながら進めていく学習活動のことです。このコースでは、座学に加えて、実習やプレゼンテーション作成などのアウトプットを前提として、プログラムに参加します。
(探求コース以外に、座学だけに参加する「聴講生コース」もあります。)

講師(例)

神崎 宣武 氏
(民俗学者・高梁川流域学校 校長)



大原 あかね 氏 (公益財団法人大原美術館 理事長)

大久保 憲作 氏 (倉敷木材株式会社 代表取締役会長)

その他、地域おこし協力隊OBで起業して活躍中の皆さんや、高梁川流域学校の役員メンバーなど事業の実践者、あるいはスキル・ノウハウの専門家、高梁川志塾OB/OGなど、多数の講師を予定しています。

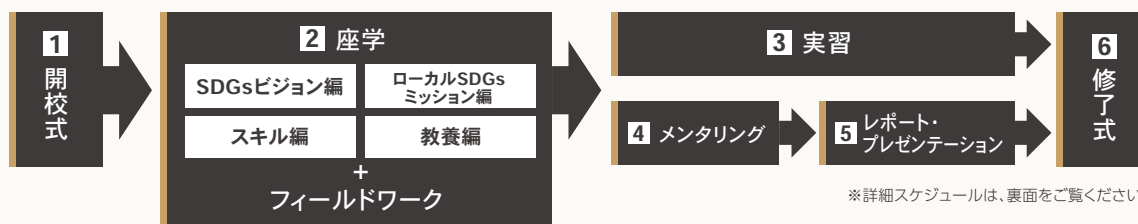
参加者の声



岩崎 真子 さん

倉敷市地域おこし協力隊員
倉敷薄荷陳列所所長

高梁川志塾では様々な分野の話を聞くことが出来たので、自分の視野を広げる機会となりました。プログラム終了後も受講生の方と繋がり良い刺激を受けています。三期生の皆さまとも今後関わっていただけたらと思います！



会場 倉敷市内ほか、高梁川流域全域 (講座ごとに異なる場合があります。)
(会場とオンライン受講を並用して実施)

定員 25名

運営 一般社団法人高梁川流域学校

主催 倉敷市 (本事業は「高梁川流域連携中枢都市圏事業」の一環として開催いたします)



事業については
右記QRコードにて



こんな人にオススメ

- ☒ 地域の課題解決に取り組んでみたい人。
- ☒ プロジェクトやイベントの企画・運営のノウハウを学びたい人。
- ☒ SDGsを経営に取り入れたい企業の経営者、担当者。
- ☒ NPOや地域活動に参加している次世代人材。
- ☒ SDGsをより深く知りたい、行政関係者・教育関係者など。

座学(講座)の種類

<SDGsビジョン編>

高梁川流域の2030年のビジョンと、そこに向けた課題解決のための現状の取り組みを、実践者や専門家のレクチャーでそれぞれが深く理解し、アクションへの気づきを得ることができる講座。

<ローカルSDGsミッション編>

SDGsの17のゴールを高梁川流域版にローカライズして目標設定するワークショップ。

<教養編>

高梁川流域における、歴史・文化・産業などに関する教養や、活動の前提となる知識を得るための講座。

【例】『備中志塾』シリーズ(高梁川流域学校 校長 神崎宣武氏)ほか。

<スキル編>

プレゼンテーション、ロジックモデル・ビジネスモデル、非営利団体の会計、データ分析(RESAS活用)、ITツールの利活用、オンライン会議の開催方法、ブログやSNSの活用など、団体運営やプロジェクト企画、探求学習のためのスキル・ノウハウを習得する講座。

<フィールドワーク>

高梁川流域における持続可能な取り組みの体験プログラム

【例】美観地区・総社市での視察・ワークショップ ほか。

プログラム

①開校式・オリエンテーション(必修)【2021年11月7日(日)10:00~15:10】

②座学(選択)【2021年11月7日(日)~2022年2月20日(日)※日程調整中】

高梁川流域の第一線で活躍する豪華講師陣による講座をご用意しています。

※期間中、2時間(前半講義・後半ワーク)×最大30コマ程度(SDGs探究コースは主に平日夜もしくは土日の開催/企業コースは主に平日昼での開催)

※1コマは、2時間10分を基本的な組み立てとしています。内訳は、1時間のレクチャー、10分の休憩、1時間の質疑応答(もしくはワークショップ)の予定です。

※SDGs探究コース/企業コースにどちらにご参加いただいても、全コースのプログラムを受講可能です。

※第1期・第2期のアーカイブ動画も視聴可能です。

③実習【2021年11月7日(日)~2022年2月20日(日)※日程調整中】

運営側で指定する団体の活動に参加する、又は自身のプランに即した実習/実践を行い、期間中20時間程度の現地実習を行います。

④メンタリング【2021年11月7日(日)~2022年2月20日(日)※日程調整中】

実習の前、中、後で、メンターとの面談を行い、ご自身のプランのブラッシュアップや、最終発表に向けた相談などを行います。

⑤レポート・プレゼンテーション(必修)

【2021年11月7日(日)~2022年2月20日(日)※日程調整中】

自らのテーマ・関心に合わせて、レポートもしくはプレゼンテーション資料の作成を行います。

⑥修了式(必修)【2022年2月20日(日)終日】

それぞれの活動及びレポートもしくはプランについての発表を行います。

■ SDGs探究コース

	土日	平日
1限	10:00 ~ 12:10	
2限	13:00 ~ 15:10	
3限	15:30 ~ 17:40	
4限	18:00 ~ 20:10	4限 18:00 ~ 20:10

■ 企業コース

	平日
1限	10:00 ~ 12:10
2限	13:00 ~ 15:10
3限	15:30 ~ 17:40

受講形態

各講座の開催会場で直接受講、もしくはオンライン(Zoom等)での受講を選択。

※SDGs探究コース受講生は、専用の「Googleクラスルーム」へご招待となる予定です。事前にGoogleアカウントの作成をお願い致します。

※新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、オンラインのみ開催となる場合もございます。

参加費

①SDGs探究コース・企業コース受講生

一般12,000円(税込) / 学生 8,000円(税込)

(全プログラムへの当日参加、アーカイブ視聴が可能)

※会場受講・オンライン受講に関わらず一律料金

※フィールドワークは、内容により別途実費での参加費がかかる場合がございます。

※一部、アーカイブ受講不可の講座もございます。

②聴講生(座学のみ参加)

会場受講:1,500円/回(人数制限あり) オンライン・アーカイブ受講:500円/回

※基本的に座学のみご参加いただけます。

※後日参加者のみ閲覧できるページをご案内予定です。

※講座によっては、別途、実費を徴収する場合がございます。

※講座によっては、無料公開の場合がございます。

決済方法(事前)

①クレジットカード(全コース共通)

※お申込みをいただいた方に決済用のページをご案内

②銀行振込(SDGs探究コース・企業コース生のみ)

中国銀行 倉敷駅前支店 普通 2546091

一般社団法人高梁川流域学校 代表理事 坂ノ上博史

(シャ) タカハシガワリュウエイキガクコウ ダイヒョウリジ サカノウエヒロシ

※企業コースで請求書が必要な方はお申し付けください。

お申し込み方法 ※第一次締切:10月31日(日)以降定員に達するまで、随時募集

お申し込みはこちら(各コース共通)

1 メール: seminar@takahashigawa.or.jp

- ご所属 ●ご氏名(ふりがな) ※複数の場合は全員分 ●電話番号 ●ご住所
 - ご希望のコース(企業コース/SDGs探究コース)
 - 決済方法(クレジットカード/銀行振込) ●この講座を知ったきっかけ
 - 紹介者の氏名(紹介者がいる場合のみ) ●受講方法(会場/オンライン)
 - ご参加への想い
- をご記載の上、上記メールアドレスまでお送りください。

2 Googleフォーム

<https://forms.gle/shELR8rywFfy6PwX6>

聴講生として受講をご希望の方は、事業HP等にて各講座のお知らせをいたしますので、そちらからお申し込みください。



本件に関するお問い合わせ先

一般社団法人 高梁川流域学校 事務局(担当:山本・梶谷)

【電話】086-527-6248(分福代表) 【FAX】086-691-2289 【メール】 seminar@takahashigawa.or.jp

【住所】岡山県倉敷市中央2丁目13-3 住吉町の家 分福



SDGsの説明と カードゲームXの体験

柏原 拓史 氏

講師の柏原拓史さんは、教育現場と地域を巻き込み多世代交流の機会を創出するNPO法人だっぴの創設者でもあり、環境教育の普及や人材育成の業務を通じた社会教育活動に従事されています。

講座では、SDGsの成り立ちやその意義についてお聞きしSDGsへの基本的な理解を深めたのち、金沢工業大学が作成したSDGsカードゲーム「X」と、アスエコが同大学協力のもと作成した、岡山県内の課題をもとにしたオリジナルのカードゲームを実際に体験し、SDGsの達成にとって重要な「変革」をもたらす発想の過程を体感しました。

受講生からは次のような感想をいただいています。

「SDGsの目標を達成するためには『変革』が必要で、このカードゲームはSDGsの内容を学ぶものではなく、『変革』に必要な発想力を身につけたり、実際のアイデア出しに使えたりする点がとても実用的だと感じました。実際にゲームをやってみると、漠然と考えるよりも3枚のカードの中で考える方がアイデアを出しやすかったのが面白かったです。岡山県版があったり、瀬戸内市版を作ってそれを政策提言に活かしたりと様々な活用がされており、浅口でも何か活用できないか考えたいと思いました（中濱さん）」

最近ではSDGsという言葉色々な場所で耳にしますが、今回改めてSDGsについての基本的な考え方や意義について学べたことは、今後の私たちの活動にも役立つはずです。

「新しいアイデアは既存の『知』と既存の『知』の新結合によって創出され、遠い『知』の新結合はより大きな変革をもたらす」

この言葉を胸に、頭を柔らかくしてSDGs達成に向けた変革のヒントを探し続けていきたいですね。

（高梁川流域学校 事務局 梶谷／Facebookより抜粋）



井原市フィールドワーク

伊達 卓生 氏

美星天文台 次長

松島 彩 氏

フリーアナウンサー

講師の伊達卓生さんは美星町職員時代、1989年の光害防止条例の制定にも関わられ、美星町の星空保護活動と星空による町おこしに積極的に取り組まれています。また、コーディネーターの松島彩さんは志塾第1期生でもあり、美星町の星空保護活動をテーマに特別番組も制作されています。

講座では、中世夢が原を三村園長の案内のもと、中世の人々の生活に思いを巡らせながら散策した後、美星天文台にて4D2Uを鑑賞し、宇宙の果てしない広さと歴史に圧倒されました。また口径101cm望遠鏡で昼間でも見える金星やデネブを観賞。夜空を見上げ、肉眼での金星観測にもチャレンジしました。

受講生の皆様からは次のような感想をいただいています。

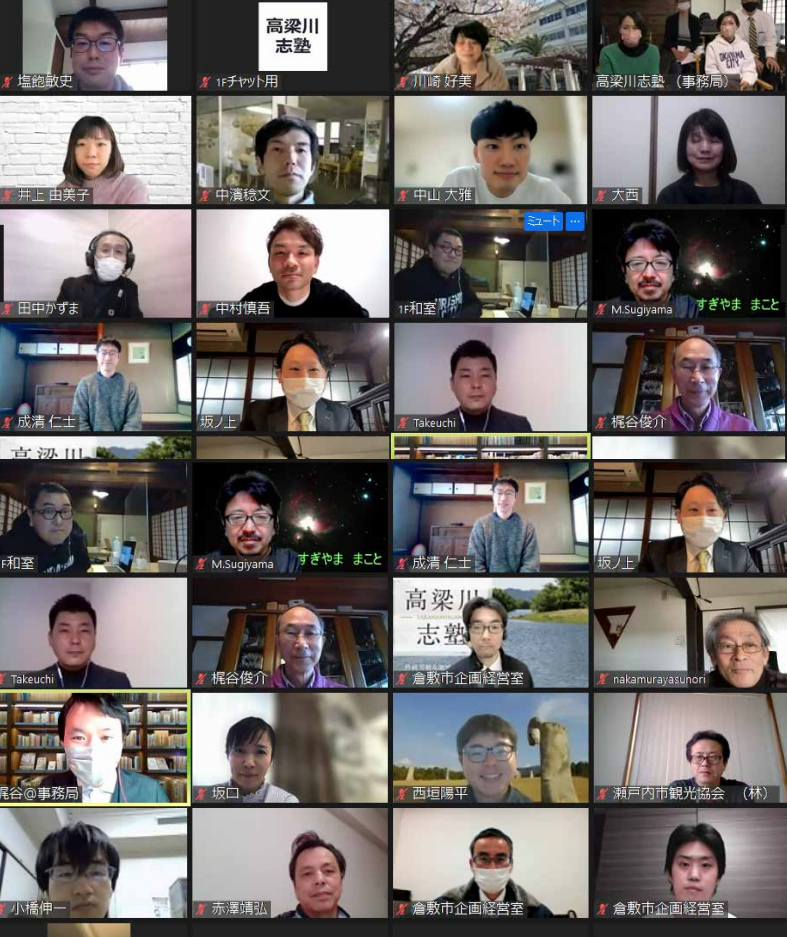
「いつもオンラインの参加でしたが、初めてリアル参加となりました。中世夢が原も天文台も五感で学ぶことは心に染み入りますね。もっと一緒に活動することが大切なのだろうと思います。昼間に肉眼で金星をみつけるワクワク感はいくらも忘れることは無いでしょう（匿名希望）」

中世夢が原の建物は、高梁川流域学校の神崎校長指導のもと、歴史資料に忠実に再現しているのですが、現在の技術では再現が難しいものも多く、作業が難航したというお話もお聞きました。技術の伝承の重要性和難しさを感じました。

また星に関しては、街路灯を上方への光漏れの少ないものへ変えるなど、地域住民の理解・協力を得ながら星空保護の取り組みを進め、ついにアジア初のダークスカイ・コミュニティへと至ったそうです。

歴史の浪漫と星空・宇宙の雄大さに触れるとともに、それらを伝える美星町の取り組みの根幹強さにも胸を打たれた一日となりました。

（高梁川流域学校 事務局 梶谷／Facebookより抜粋）



高梁川志塾開校式・修了式

高梁川志塾3期目 ～立場を超えた連携の可能性～

第3期は、2021年11月～2022年2月の期間で開催し、新たに企業コースとして間口を広げ、受講生は23名、うちSDGs探求コースが15名、企業コースが8名となりました。

第2期に引き続き「地域（歴史・文化・産業など）の理解促進」「SDGsの理解促進」「実践に向けたスキル・ノウハウの習得」「フィールドワーク（倉敷、井原、総社）」で構成をしました。

新たに、地場企業にお邪魔してSDGsに関する取り組みなどを伺う講座や、「倉敷市・高梁川流域SDGsパートナー」の講師による講座などを追加しました。

また、ローカルSDGsの講座では倉敷商業高校の生徒によるプレゼンテーションを盛り込んだり、「高梁川流域原論」と題して、ミッシェン編・データ編・対話編と切り口を変えながら講座を設けたりと、多様なステークホルダーとのパートナーシップの重要性や流域単位で考える機会を増やしました。

開校式は、第2期と同様に住吉町の家分福で開催し、企業コースの方も交えてこれまでとはまた異なる良い雰囲気でのスタートを切ることができたかと思えます。

「ローカルと都市との対比について考えることができました。居住はしていないものの、営業でこの地域を回らせていただいたことや、個々人との関わりを今一度見つめなおすことができ流域の風土など特色について認識できたように思います」などの感想をいただきました。

成果発表会・修了式では、第2期と同様に岡山県でもまん延防止等重点措置の適用を受けたことにより、感染防止の観点から、原則としてオンラインでの実施となりました。

第3期は、オンラインではありませんでしたが、第1期のようにお一人ずつ5分間のプレゼンテーションを行う形となりました。

主催の倉敷市やお世話になった講師の皆様、高梁川志塾OBOGの皆様にもご参加をいただき成果発表を見守っていただき、貴重なフィードバックもいただきました。

今年度の成果をもとに、第4期・第5期に向けて、流域全体への広がりや、塾生の取組み、更に地域課題解決への後押しとしていけるよう、関係者の皆様のお力添えをいただきながら、運営スタッフ一丸となって取り組んで参ります。



「人づくり＝地域づくり」を実感、 実現できる高梁川志塾

杉山 誠(高梁川志塾3期生)

インタビュー 原田 也重子

高梁川志塾第3期生として「SDGs 探求コース」を受講された杉山誠さん。とにかく「自分が目にしたたり、気になったりしたことはやってみたくなる」という性格だそう。これまで天体写真や釣り、バーナーワークなど多彩な趣味に取り組んでこられたとのこと。そんな杉山さんが、今取り組んでいる「うちわづくり」と「高梁川志塾」の関わりについて伺いました。

杉山さんが高梁川志塾を受講しようと思ったきっかけは、「人とのつながりで、知り合いや人の輪を広げたい」という思いからです。「ボランティアでさせていただいている観望会も、私ひとりではできませんからね」と話します。

また、仕事の関係で、西日本を中心に転勤を繰り返してきた杉山さんにとって、赴任した地域を深く知り、馴染むためには、「人とのつながりを持つ」ことが自然な流れだったのかもしれませんが。加えて座学の会場だった「住吉町の家・分福」が、杉山さんの自宅から近いことも講座受講を後押ししました。

高梁川志塾の幅広い講座内容や、多岐にわたる講師陣は、当初考えていた「仲間づくりの場」以上のものだったと杉山さんは実感したそうです。中でも仕事の傍ら星や天体の観望会のボランティア活動をしている杉山さんにとって、美星天文台次長の伊達卓生さんや、高梁川志塾1期生でフリーアナウンサーの松島彩さんとの出会いは、「ここでこの人たちに会えるとは！」とワクワクした気持ちと人の縁を感じたそうです。

さらに大原美術館館長の大原あかねさんによる倉敷考古館の紹介や、大阪市から笠岡諸島の六島に移住し、地ビールの醸造に取り組んでいる井関竜平さんの話は、好奇心旺盛な杉山さんの刺激になったことは間違いないようです。

杉山さんの成果発表会のテーマは「神代(こうじろ)和紙を使った新たな特産品」。発表内容は新見市の伝統的な和紙と、香川県の丸亀うちわとの出会いのストーリーでした。

杉山さんと「神代(こうじろ)和紙」との出会い、新見市西方の新見美術館で開かれていた「假屋崎省吾の世界展」。神代和紙を使った花の作品を目にし「せつかなら、実際に紙すきをしているところに行ってみよう」と思ったそうです。

その後、長らく途絶えていた地域の伝統を復活させた神代和紙保存会の方と知り合い、ようやく杉山さんが取り組んでいたうちわづくりにマッチする理想の紙に出会いました。新見市は高梁川源流の町。新見市も高梁川が関わっていることに、杉山さんは後から気付かれたようです。

「丸亀うちわ」との出会い、杉山さんがたまたま勤務先に近い香川県の高松駅で見かけた1枚のポスター。「ポスターの内容が、そば打ちとか陶芸とかだったら、また別の方向に進んでいたかもしれない」と、いくつもの偶然が1つにつながった喜びを感じておられました。

高梁川志塾には「SDGsを学べる場」「高梁川の歴史と文化を知ることができる塾」「大人の探求学習」「ソーシャルビジネスや地域活動を始めた人のスクール」「仲間づくりの場」の5つの要素があります。杉山さんは、座学とフィールドワークを通じて、「人づくり」地域づくり」を実感、実現できる場であることを今まで以上に強く意識できたそうです。

杉山さんの原点は「モノづくり」と「星や天体」です。幼いころに夢中になった木の切れ端や竹でのおもちゃ作り。中学生の時、学習用天体望遠鏡で土星のリングを初めてみたこと。それ以来、杉

山さんがモノづくりと星や天体に取り組み続けてきた原動力は、「もつとうまく作りたい」「もつとその先を知りたい」「誰かと知り合いになれば、もつと広がる世界があるかもしれない」という学びと好奇心でした。

「うちわづくりも和紙も、特に伝統工芸を担っているというほどのものではありません。観望会も教えているという立場ではありません。私のできることで、何かを伝えていくことができればいいという思いが、少しでもSDGsにつながればと思います」と杉山さんは語りました。

成果発表会の後、NPO法人倉敷町家トラスト代表理事の中村泰典さんが杉山さんの活動に興味を持ち、「うちわのワークショップをやってくれませんか」と声をかけられたそうです。ただし、2022年3月現在、まだ新型コロナウイルス感染症が収束していないこともあり、具体的にはまだ何も進んでいないようです。しかし、杉山さん自身も「今後の予定」にワークショップでの活用を挙げられていたので、そのきっかけが持てたことは「本当にうれしかった」と言います。

高梁川志塾で生まれた、杉山さんの新たな人とのつながりと旺盛な好奇心が今後どのような広がりを見せるのかが楽しみです。

地域と関わる人々のつながりが、「点から「線」を経て「面」となる可能性を実感できることがSDGsのひとつの意味ではないでしょうか。「高梁川志塾」は、それを体験できるのが魅力だということに、筆者自身が気づかされるインタビューでした。

杉山 誠

子供の頃からものづくりに興味が有り、身の回りのおもちゃなども手作りをしていました。2019年に、最寄り駅で見た、「丸亀うちわ後継者育成事業」の受講生募集というポスターをきっかけに、竹を使ったうちわの作り方を学び、今も練習を重ねています。その後、うちわの材料となる和紙を探中で、新見の神代和紙の作り手さんとの偶然の出会いから、新しい新見の特産品としてのうちわの制作を開始しました。

COMMENT

天文博士。器用な手先。気さく。学びと遊びの達人。お髭も最高。まるで現代版アインシュタイン!?肩肘張らず情熱的で、杉山さんの背中には“SDGsの源泉は好奇心・探求心”と書いてある。常に活動的なその姿は、流域の人々も未来も“誠に”明るく照らしている!

フリーアナウンサー
高梁川志塾1期生 松島彩





生きるための本能を 揺さぶられる場所

大西 万理子(高梁川志塾3期生)

インタビュー 片岡 紗弓

高梁川志塾に第3期生として高梁川流域学校に関わった大西万理子さん。普段は一般社団法人くらしきの「生活訓練事業所ちやるか」で、精神障害の自立訓練の仕事をしています。生活訓練事業所ちやるかの立ち上げから3年経過し、令和4年4月より就労継続支援B型事業を開設予定です。令和3年11月から翌年2月までの約4か月間行われた高梁川志塾で大西さんは何を感じ、学ぶことが出来たのか、お話を聞きました。

大西さんが、高梁川志塾3期生の門を叩いたきっかけは、「自分のしたいことがSDGsなのか確認するため」だったそうです。大西さんは過去に行政の保健師として、感染症対策や自然災害対応、震災派遣、精神危機対応、児童相談所など様々な分野で活躍してきました。しかし、自身のワークライフバランスと向き合い、退職を決意されたそうです。その時に、大西さんの心を癒してくれたのは「綿」でした。

倉敷市と市外の2か所で1から綿を植えて育てる日々の中で、体と心を回復させていたそうです。そして、これまでの仕事の経験を活かし、福祉事務所をスタートしました。利用者と関わる中で、地域に馴染めない人たちがいることに気づき、その人たちのための「仕事」を考えるようになりました。

仕事を考える中で大西さんは、自信と誇りを持てる仕事を提供できないかと考え、思いついたのは綿を使った紡績でした。紡績を思いついた時に、「これは、地球に優しいSDGsではないか」と思ったそうです。それを確かめるように情報を検索している時に「高梁川流域学校」に出会い、参加を決めたそうです。

高梁川志塾との出会いは、大西さんに「知識と

いうよりも五感。感覚でSDGsとはこういうものだ」と気づきを与えてくれました。高梁川志塾に参加した際に講師の皆さんが「体の中に入る水」という命の源を共有し繋がっていることを強調されていたことが印象に残っていると話します。50年ぐらいい前と今を比較して、世に残すべきものがあることに気づきました。

倉敷市美観地区のフィールドワークを通して大西さんは、倉敷市に住んでいるにも関わらず、美観地区を歩くことがあまりないと気づきました。また、フィールドワークを通して、保護地区の建物が近隣や地区を思いやりながら生活できるような家を建てているという話を聞いたそうです。

また、阿智神社の方から見た町の景色は、倉敷を意識して瓦を用いた屋根がありながら駅前は大きなビルが立ち並びます。それを見ると、「ルールは誰のための、何のためのルールなのだろう」と考えたそうです。何気ない景色の中に風土や歴史、文化を見つけることを通して、言葉に出来ない五感の中でSDGsを体験し、見方が変わったと大西さんは語りました。講義とフィールドワークを体験できる場所が高梁川志塾だったのです。

高梁川志塾に繰り返し参加し、塾生の人となりが見えてくると、地域領域で繋がっている感覚が芽生え始めたそうです。この感覚を、大西さんは「生命体共同という意識」と語りました。志塾以外のところで、新たな人との繋がりが生まれた大西さん。繋がりの中で、「協力できないかな、協力してもらいたい、一緒にできそう」などの考えが生まれ、個人ではなく、パートナーシップで頑張ることに気づきました。大西さんの話から、人と人の繋がりが新たな未来を築き上げていくのだと感じました。

大西さんは、高梁川流域学校で起業した人たちに出会い、「自分が苦手なことをやっても意味な

いよ」と言われたことが胸に刺さったそうです。そして、「自分の好きなことは前面に出すべきだ。大好きな綿で本物の糸を紡ごう。倉敷は繊維の町だから」と決意しました。

高梁川志塾を通して、大西さんの取り組みはSDGsであることを確認出来ました。これから、「障害があっても働けるSDGsな就労継続支援B型事業所」をスタートする大西さん。大西さんの心を癒してくれた「綿」は、CO2を吸収してO2を排出するため、地球に優しい糸の材料と語りました。

地元にある不要になった布団綿を使うことで、紡績の原材料となる綿の輸送にかかるエネルギーを抑え、ゴミも削減できます。このサイクルは、気候変動の対策や豊かな緑を守ることに繋がるのではないかと感じているそうです。

明治時代に日本で発明されたガラ紡で綿を紡ぎます。扇風機のモーターくらいの電力で使うことができるそうです。機械操作も簡単のため、障害のある人でも使用できる上に日本発祥の文化を守るのではないかと語ります。高梁川志塾で学んだパートナーシップを活かし、目標を達成していきたいと話すと大西さん。嬉しいことに、児島や神戸に綿のサンプルは旅立っています。

「生きるための本能を揺さぶられる場所」

大西さんとの対談の中で、影響を受けた言葉です。高梁川志塾は、5感でSDGsを体感し、好きなことを前面に出しながらも新たな価値観を紡ぎ上げる糸のような場所。「感じて知る」ことで生きるためにしなければならないことを掴む場所。本能を揺さぶられる経験は、高梁川流域に住む全ての人が自分らしく生きることの出来る持続可能な社会をつくる未来、繋がるのではないのでしょうか。

大西 万理子

公務員を早期退職し、現在は倉敷市内で障害福祉サービスの事業所を運営しています。

今年4月に就労継続支援B型事業所を開所予定です。SDGsに取組む事業所づくりのため高梁川志塾に参加しました。とても刺激になりました。次の目標は、繊維のまち倉敷で小さなガラ紡の糸工場として根付かせることです。



一輪の綿花からはじまる倉敷物語

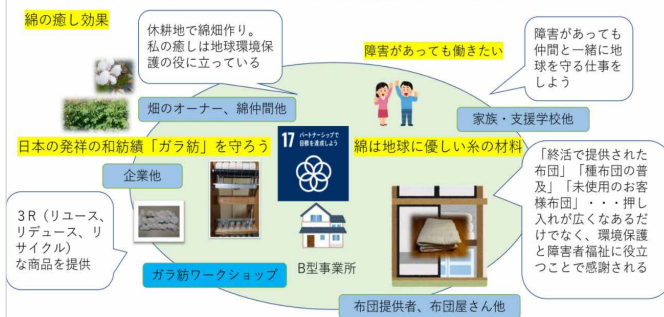
～SDGsな就労継続支援B型事業所の立上げに向けて～
一般社団法人くらしき 大西 万理子

COMMENT

高梁川志塾を「生きるための本能を揺さぶられる場所」と感じるほど前のめりに楽しんで受講されていた大西さん。優しい笑顔と「私がやらなきゃ!」という使命感で、仲間の共感をどんどん集め、きっと持続可能で幸せあふれる地域を実現されると確信しています。

高梁川志塾 事務局 山本将徳

地域と共にSDGsな事業所づくり





身近に寄り添う 金融機関を目指して

竹内 義哲（高梁川志塾 3 期生）

インタビュー 船越 なお子

竹内義哲さんは、中国銀行で地元企業を金融の面から支えるお仕事をしておられます。地域社会の中で、金融はどうあるべきかという問いの解を求めて高梁川志塾に参加された竹内さん。高梁川志塾に参加して何らかのヒントを得ることができたのか、考え方や気持ちに変化があったのかなどについてお話を伺いました。

竹内さんの銀行でのお仕事は「法人ソリューション担当」。長年「お客様の役に立ちたい」という思いを持ち、さまざまな課題を解決しようと努めてこられました。例えば、「後継者が見つからない」という悩みを抱えている企業に対して、事業承継のメニューを提示。

また、「従業員がなかなか定着しない」企業には人事コンサルティングを提供する、といったように。

しかし、従来型の銀行のビジネスだけでは、なかなかお客様の課題を解決できない気がしていた竹内さんは、日々仕事をする中でモヤモヤしたものをずっと抱えていたと言います。

そのような中、竹内さんはそのモヤモヤした心情がある人に話したのだそうです。その人はお客様でしたが信頼できる人でした。それが株式会社倉敷木材代表取締役会長の久保憲作氏。高梁川流域学校の相談役でもあります。

竹内さんは、久保氏から「だったら志塾に参加してみれば」とアドバイスをもらい、それが高梁川志塾参加の直接的な引き金になったそうです。竹内さんは高梁川志塾に参加してみて、今まで仕事で関わってきたお客様とはちよっと違う目線の人たちが多かったと振り返ります。

一番驚いたのは、「地域のために、こんなにも熱量を持って活動している人たちがいるのか」ということでした。

同時に、資金面で不安や悩みを抱えている人たちがたくさんいることも分かりました。竹内さんは「熱量があってもお金がなければ、良い活動もそのまま終わってしまうのだな」と残念に感じました。同時に自分ができることを何かさせてもらいたいと思うようになったそうです。

「お金について、気軽に相談できたり借りたりしやすい所があると伝えたい。そんな場所があると分かるだけで、きつともつといっぱい面白い何かが立ち上がってくるんじゃないだろうか」

それが、今回竹内さんが高梁川志塾に参加して行きついた、ソリューションの種でした。

可能性を感じ始めた竹内さんでしたが、志塾に参加している間にショックなこともあったそうです。同期の塾生と話をすることで「金融機関とは距離がある」という発言があり、申し訳ない気持ちになりました。

「遠い存在、なんか行きにくいと言われている時点で負けるような気がして。だからこれからは僕らの方から積極的に参加する体制を作ろうと思っています」

その言葉からは、たとえ現状にマイナス要素があっても、その解決策を自ら探り、新しい一歩を踏み出そうとする強さを感じます。金融のプロフェッショナルのプライドのようなものが垣間見えた気がしました。

お金を貸す側の気持ちとして、「こんな人にお金を貸したい、こんな人には貸したくない」というポイントのようなものがありますか？という質問をしました。すると竹内さんは「最後は人だと思っています」と迷うことなく即答。その時に話してくれたエピソードは今も心に残っています。

「金融機関として、大事なお客様から預かったお金だから返していただくのは大原則です。し

かし、この人だったらしょうがない、と思える人が中にはいます。例えば、ある食品関係の会社の社長さんは、『親に食わせたくないものは絶対作らんからな』と言われてポリシーを持って仕事をされています。逆に、『数字がいい』会社でも嘘や隠し事があつたらダメですね」

竹内さんは、高梁川志塾に参加して一番嬉しかったのは、「人と人の繋がり」ができたことだ、とも言われていました。

志塾を通して「銀行にできることで地域社会に貢献したい」と強く思うようになった、と語る竹内さん。地域のため、社会のために活動する人たちの役に立ちたい気持ちはあっても接点がなかったというのが、今までの竹内さんの悩みでした。しかし、志塾で多くの仲間に出会い、共に学ぶ中で気持ちが変わったそうです。

「これからはお金を必要とする人たちが集まるところに自分たちの方から入って行こう、交流しよう」と思うようになりました。「個人でできることは限られているので、銀行という本業で貢献したい。身近な存在でありたい。銀行は近寄りにくいという意識を変えていきたい。」今、竹内さんのモヤモヤは晴れ、目の前はますます遠くまで見渡せているように聞こえました。

地域のため・人々のためにすでに大きな仕事をしている人がいます。しかし、その人たちも一人だけで何かを成し遂げたのではないはず。想いと熱量を持って活動する人たちのまわりには、金融を含めいろいろな形でサポートする人たちが集まるでしょう。だからこそなにかを実現できるのだと竹内さんのお話を聞いて改めて感じました。このような出合いや学びが皆さん詰まっています。これから「高梁川志塾」。これからたくさんの化学反応が生まれることでしょう。

竹内 義哲

1987年、岡山県出身、3児の父。2010年4月に中国銀行に入行し、現在は倉敷駅前支店の法人ソリューション担当。銀行員として、もっと地域社会の役に立ちたいと思い、高梁川志塾への参加を決意。志塾参加をきっかけに、支店の他のメンバーを巻き込み、自分たちが継続的に地域社会の為にできる活動を模索中。

COMMENT

銀行員として地域のみなさまの課題解決に貢献したいと強い想いを抱えている竹内さん。高梁川志塾の活動は、社内のメンバーにとって多くの学びと刺激がありました。地域活性化の伝道師としての更なる活躍を期待しています。

中国銀行倉敷駅前支店・倉敷北支店
支店長 坂口有美子

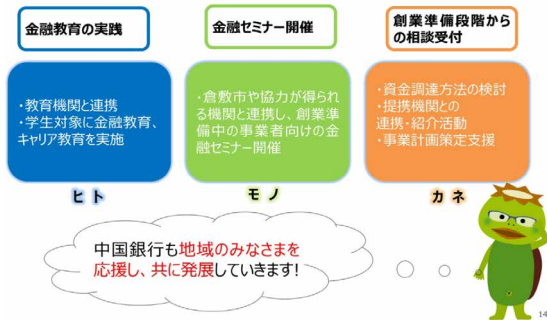
2. 志塾参加を通じた気づき



- ・実際に様々な**地域課題解決**の為に多くの方が活動されていること。
- ・活動していくにあたり、「お金」の面での不安(**資金調達**)や、何から始めたらよいか分からない(**事業計画**)という、**社会事業家のニーズ**を把握。
- ・**地域金融機関として、活動継続・事業継続の為に力になりたい。(伴走型金融)**



4. 提言 ～具体的アクション～







高梁川流域学校

住所 〒710-0046 岡山県倉敷市中央2丁目13-3
電話番号 086-527-6248
FAX 086-691-2289
メールアドレス info@takahashigawa.or.jp
WEB <https://takahashigawa.or.jp/>

第2期・第3期の講座を収録した動画をご覧になりたい方や、今後の最新情報をご覧になりたい方は、「高梁川志塾」のウェブサイトをご覧ください。

高梁川志塾

検索



高梁川流域学校